

身近な場所から「ありがとう」

福島大学附属中学校3年 片桐 美音

がれきだらけの教室、鉄筋がむき出しになっている天井。体育館は、「卒業証書授与式」とかかれた幕が掲げられたままだった。半年ほど前に、浪江町の請戸小学校に行く機会があったが、その一階部分は今でも震災当時のままに遺されていた。請戸小の至るところが津波の威力を物語っていた。私は、あまりにも悲惨な状況に言葉を失ってしまった。

浪江町は復興の最中で、小学校に来る道中、作業をする重機を何度も見かけた。まだ荒れている土地はあったが、復興は着々と進んでいるようだった。思い返してみると、請戸小の二階や展示スペースは綺麗に整備されていたし、途中の道の駅もとても新しく、お客さん達が買い物を楽しんでいて、それだけを見ると、とても被災した町とは思えなかった。

もちろん、無料で復興することなどできない。調べてみると、震災が起きてから、国の歳出に「東日本大震災復興特別会計」が設置され現在までにおよそ三十二兆円が投入されたらしい。国の歳入の六割は租税である。福島の復興は税金の上で成り立っていたのだ。私は改めて税金のありがたみを感じた。

そんな税金は、復興だけに使われている訳ではない。道路の整備や警察、消防費、社会保険や社会福祉など、様々な場面で税金が利用されている。社会のさまざまな活動を担っているのが税金であり、私たちの納税なのだ。

しかし、私たちはたびたび税金に嫌悪感を抱いてしまう。私はまだ中学生でたくさんの税金を納めている訳ではないが、それでも買い物の時、

「消費税が無ければ買えたのに。」

と思うことがしばしばある。納税は国民の義務であるが、悪く言えば強制である。そのため、納めたくないが納めなければいけない、とマイナスなイメージを持ってしまうのだろう。税金を「とられる」といった言葉も、そんなマイナスな気持ちが表れている気がする。

現在日本は少子高齢化が進んでいて、年金や医療費などで今後ますます歳入が必要になる。そのため、もしかしたらまた増税が行われるかもしれない。私はそのような時、嫌だなど考えるのではなく、身近な税金が使われている場所をさがしてみたい。そうすると、浪江町の請戸小学校見学の時のように、税金にありがたみを感じることができ、プラスなイメージを持てるだろう。たしかに、税金に対する嫌悪感を完全になくすことは難しいのかもしれない。しかし、税金について正しく知り、身近な場所からありがたみを感じることが、嫌悪感を無くす第一歩だと、私は思う。

私はこれからも、社会を支えるため、税金を「納める」ようにしたい。